



1966-3 News

新年おめでとーございます。 今年も仲良くいたしましょう。

1. 阿弥陀岳広河原沢ニルンゼ (偵察山行) 1965.11.22(晴)

パーティー : 森崎 孟 ・ 中野 融

6時に快適だった岩小屋を出発する。右俣の出合あたりで空が明るくなる。滝を六つほど数えるとゴルジュになり奥に5米ほどの滝を落している。薄氷が張り悪そうなのでゴルジュの手前に左から入っているガリーを登り右の枝尾根に取付く、20m程登ってから草付を水平にトラヴァースする。足下には六段ナメ滝が見える、次に降りて滝を一つ越える。巨大なチョックストンの滝で左側を登り落口に向って慎重にトラヴァースする。ここで沢は急激に左に折れ、曲り滝を二つはさんで再び右に折れるとジャンクションフォールが現われた。ヨルンゼはジャンクションフォールの50mほど下で落ち込んでいる。

出合で休んだのちヨルンゼに入る。大石を積み重ねた様なF₁を越える。とすぐF₂で完全に凍結している。氷と岩のコンタクトラインを登る。F₂上でZルンゼとの中間尾根を登る。草付の上に新雪が積っており緊張させられた。尾根上でアイゼンを着けザイルを結ぶ。Zルンゼに降りるといさなり氷瀑で森崎さんがトップでステップを切る。15m程の垂直の滝は右の草付と氷の斜面を登りバンドをトラヴァースして落口に立つ。ルンゼはこの上も凍っておりカッチャングに終始する。つるべ式に5ピッチで大滝の下に着いた。ニニニルンゼとの中間尾に登る灌木帯を少し登り40m程のナイブリッジを登るとルンゼの奥壁に行く手を阻まれた。少し休んだ後トラヴァースにかかる。壁の下を右に3ピッチトラヴァースしてルンゼに降りる。ルンゼの氷が溶けはじめたのでなるべく岩を登る事にする。二俣近くではルンゼも広くなり傾斜も弱まって来る。二俣近辺が岨底を登る広々様か傾左に入るといやなハイ松だが意外に早く抜け出て摩利支天の稜線に立つ事が出来た。阿弥陀岳に登って昼飯を食べる。

空は相変らずの快晴で目の前の南アルプスをはじめとせ中央・北アルプスの山々は白く輝いている。頂上は風が強く寒いので昼飯をすめせるとすぐ下る季にする。赤岳の西壁を正面に見ながら中岳のコルをへて行者小屋に下る。

コースタイム：岩小屋(6:00)——右俣出合(6:18)——ヨルンゼ出合(7:40~
~8:00)——大滝(10:15)——横断バンド(11:00~11:25)——奥の二俣(12:15)——
摩利支天(12:50)——阿弥陀岳(13:10~13:30)——中岳のコル(13:55)——
行者小屋(14:30)

(記 中野 融)

2. ハッ岳阿弥陀岳広河原沢2ルンゼ

1966.1.1. ~ 3.

パーティー： 神田・水島・永島・中野

1月1日 (晴のち曇)

美濃戸口(7:50)——御小屋尾根分岐(8:05)——林道に出合う(9:10~9:30)
——二俣(10:45~10:50)——中央稜末端清陵小屋(11:30~12:35)——
ジャンクションフォール(14:00~14:15)——清陵小屋(14:55)

美濃戸口でバスを降りる。バスで来た道を引返し、御小屋尾根への分岐点に来るとトレールがある。心配していた道もトレースが有り、楽に二俣に入る。積雪は例年より大分多いようである。二俣からトレースに従い清陵小屋に入り昼飯をたべる。今後の行動を相談するが、今日はジャンクションフォール(J.F)逆ラッセルをし、登攀具・ガンリンノル等を荷上することにした。昼飯後荷上岳を持ち沢筋に降り立って立派なトレースがついている。意外な感じで登って行くと上から4人降りて来た。どうやらこの人達がラッセルをしたらしい。トレースに感謝しながらグングンと高度を上げて行く。11月下旬に偵察に来た時悪く感じた所も雪の下になり、ただ急斜面になっているだけである。ゴルジュ・右俣出合に着く。聞き、読みしていたJ.Fとはおよそかけ離れたものでわずか2m位しか滝が出でなく、楽に乗越すこぼが出来た。J.Fの裏に登攀具等をデポし、降りる。シリセードを混じえながらわいわいと降りる。途中イーグルを発見する。良く作っ

たものと感心する。今日のネグラは清陵小屋と川口立派な小屋に泊めてもらうことにする。帰り着くと最速小屋を清掃し、備え付の毛布を敷き快適にする。水も雪を解かして作るつもりであったが、うれしいことに沢で水を汲むことが出来た。ただ残念なことは焚火が出来ないことである。でもそんなゼイタクなことを言っではいけない。小屋の中にツェルトを張り中でラジウスを焚くとあたたかくなる。早めに夕飯を食べ、夕飯後お茶を飲みながらダベる。話はずみ夜もふけてきたが元旦であるので大目に見てもらう。しかし明日があるので寝ることにする。

1月2日 曇り

清陵小屋(5:05)——J.F.(6:45~7:10)——大滝(8:00)——横断バンド(11:05~11:40)——阿彌陀岳(13:45~14:00)——赤岳鉱泉(15:00)

夜は寒くてガタガタふるえるし、良ちゃんのイビキで眠れなかった。それでも中野君・良ちゃんはぐっすり眠っている。寒くて仕様がないのでラジウスをつけて暖をとる。うつらうつらするうちに3時を困ってしまう。3時半に起きて、ぼつらぼつら朝飯の仕度始める。朝飯を食い、完全装備で表に出ると良く冷え込んでいる。5時過ぎにヘッドランプを灯けて小屋を後にする。昨日のトレースを追いジャンクションファール迄登ってしまう。J.F.に着く頃にはすっかり夜が明けていた。昨日デポした荷を背負いJ.F.を架に乗越すと滝上はノ・ズルンゼを分けている。ノルンゼは雪が多い為、滝が埋まっているようであり、ただの急雪面のようなのである。目指すズルンゼに向っていよいよラッセルを始める。ラッセルは膝位であるが急斜面になってくる。右手に正面ルンゼを見送りラッセルを続ける。途中小さな千り雪崩れが落ちるが、約1時間で大滝に着く。大滝は正面はオーバーハングしてあり登山そうもない。右壁には斜めにクラックが走っている。左壁にもクラックと言うより凹角があるがラビーネンツークである。大滝基部で神田・永島と水島・中野の2パーティーに分けてアンザイレインする。神田トツアで右のクラックに取付く。見かけは割に楽そうである

上
危

が約10m位登った所でつまってしまった。強引に登れば登れそうであるが
ちゆうちよしている間に寒さのために左手がきかなくなり、簡単に凍傷に
なってしまった。身体がきかなくなったのでハーケンを打とうとリスを探
すが適当なリスが無い、右手上を見ると1本あった。一段上って残置ハー
ケンにカラビナを掛けようとするが、めり込んでいてどうしても掛からな
い。しかたなく捨て縄を掛けようとするがこれも掛らず、やっこの思いで
捨て縄を掛けガイルを通す。一息ついて再びクラックにアタックしたが、
左手がきかず足迄がタガタしてきたので、しかたなく下降するが半分位下
りた所でガイルが食ってしまい又登り直してガイルを充分引張っておいて
やっこの思いで下に降り立つ。今度は水島トツで左のクラックに取付く
ハーケンが打ってあり、アブミを使ってオーバーハンク長味の所を乗越そ
うとするが次のハーケンが遠くその上千り雪崩がたえまなく落ちかかり、
上を向いているさえ困難でハーケンを打つのが困難で断念せざるを得ず
ジュラルミンカラビナを残して下降してくる。残念だが大滝登攀をあきら

め、捲くことにし大滝から60m下降してズルンゼ左側の尾根を登り、雪稜に
またがってジッヘルする。尾根はハイ松の上に雪が積っており、急傾斜で
ある。雪面を80m登ってナイフリッジの岩稜に達する。雪は無く偵察の折
り登っている中野がトップに立ち、ナイフリッジを囲つんばいになりし
ながら約40mで小さなテラスに着く。テラス上は2m少々の壁であるが悪く
手こずったが、やっこの思いで乗越し岩稜を40m登ると横断バンドに着く。
早速ツェルトを張り空腹にロールパンをつめこみ、やっと心地がついた。
先程迄は空腹の為、ジッヘルしながらもガタガタふるえていたのに………
テラスから右のリッペを囲り込み、小さなルンゼを右に水平トラヴァースして
小さなスタンスで40mいっばいになりジッヘルする。次のピッチも右に水平
に草付帯をトラヴァースし35mでリッジにまたがってジッヘルする。横断バ
ンドのテラスからの2ピッチは中野が見事なバランスでトップをつとめ、我
々を導いてくれた。リッジ上コルの岩角にガイルを掛け18mのアップガイレ
ンでズルンゼに降り立つ。大滝の上を少し登った所であり、もし右壁のクラ
ックに取り付いた場合、クラックを出て勢口に向かって左にトラヴァースするの

が非常に悪そうである。左壁のクラックの方は乗越してしまえば落口迄近く
登れそうである。ここから上部はそれ程つかい難い所は無さそうで、中野・
水島・永島・神田の順にラッセルを始める。途中一ヶ所滝の上に氷が付いて
いたが、容易に乗越し、奥の二俣に着く。この辺になると心拵傾斜も落ちた
ような気がする。二俣からは左俣に入りハイ松に足をとりながらラッセル
を続ける。摩利支店のコルはもう目前にせまって、最後の馬力をかけてラッ
セルすればやっと摩利支店のコルに飛び出す。今日はまるで中野に引張られ
て登ったようであるがそれでも皆の顔に快心の笑みが浮かぶ。

阿弥陀岳の頂上に向かって歩き出す。頂上が見えた、いるいな多勢の人が。……
13時45分 頂上着、完登の握手にカガこもり例のバンガイ三唱をした後、記
念写真を撮る。赤岳・横岳の西壁はガスで見えない。阿弥陀岳北稜や中岳の
コルから多くの人が登って来て登頂して行く。我々も少し休んだ後、中岳の
コルに向かって満ちたりた気持ちでゆっくり下る。中岳のコルからは例のごとく
シリセードでとばす。行者小屋に着く頃にはガスっていた空も晴れ渡りきり
なごみの大同心・小同心が良く見える。中山乗越を越え、今夜のネグラ赤岳
鉱泉に着く。周囲には多くの天幕が張られており、多くの人が冬山を楽しん
でいるようである。我々の満ちたりた気持ちのように天気も晴れてきて、夜に
なると星が空一杯に輝いている。明日の天気を確約してくれる。

1月3日 (晴)

赤岳鉱泉(10:35) 美濃戸(11:45~12:05) 美濃戸口(12:55)

今日はものすごい天気である。今日は予定では横岳西壁の中山尾根と白
ノ岳稜を登攀する予定であったが、神田の左手の凍傷が気になるし、何
にか一本やったと云う安心感・落ちついた気持ちになってしまい登攀は中
止し、ゆっくり寝ることにする。8時過ぎに起こされ、遅いからと冷え
かかった飯と漬物を空腹を満たそうとするがこれはむりである。あまり
うまくなりので腹の方が受けてくれない。天気が良いので西壁の壁
には多くのクライマーが取り付いているのが見える。真白に輝いている西
壁を後に我々は下山にかかる。

(記 神田 和臣)

八ヶ岳東面地獄谷天狗尾根

1月16日 (晴後曇り)

水島 単独

積雪期の八ヶ岳本峰の赤岳を東面から日帰りで登って見ようと思ったのは昨年の一月中で有った。その時は積雪が多く地獄谷に入れぬ内に敗退して戻った。今度こそはの意気込みで出かける。

早朝の清里駅は多数のスケート客でごったがえす。登山者は私の他に4人居るだけで有る。駅でお湯をもらいテルモスに入れて6:30に歩き出す。清里祭の前を過ぎ美の森の分岐点に7:40に着く。空は素晴らしく晴れ上り権現岳がモルゲンロートに輝く。案じていた雪も大した争もなく林道を靴が着る位で有る。トレールが有るので楽に歩く争が出来た。初めて此々に来た争を思い出しながら歩いて行くと河原に下る地点に来た。トレール通りに河原に下る。所々に熊笹が出てくる。河原にもトレールが有り赤岳沢出合小屋に9時30分着。見上げる天狗尾根に大天狗の岩峰が意外と近い所にそびえている。小屋には2人の人達が居て火を燃していた。休んで行きたい所だが気が急いでいるので装備を付けアイゼンをはく。前日か今日早く天狗尾根に向ったパーティーが有るとの話で有った。10時に小屋を出る。赤岳沢出合を右に見て本谷を進むと右手に立派な岩小屋が有る。少し左くと正面から広い権現沢が入って来る。本谷は此々から急に右に曲る。トレール通り登って行くと又右岩に岩小屋が有る。目的のカゲ沢はこの辺りに有る筈と思いながら登って行くがさっぱり分らず通り過ぎて了い天狗沢の出合に出た。又もって左方を注意しながら行くと沢と云うよりも漣と云った方が良い所についているトレールを見付ける。登って見るとこれがカゲ沢で有った。記録に出ていた小さな氷瀑が有る。輪かんの跡らしきトレールに感謝しながら登る。思ったより雪は少い。独りで登って行くと時間ばかり尻になる。おまけに灌木の多い尾根で大天狗の岩峰がちっとも近くならずいらいらする争おびただしい。ふんばんに時計を見ながら登って行くと前方の木立の間に何か動くものが見える近づくともリスで有った。可愛い目をして私を見ていたがさっとかくれて了った。

赤岳沢の方から采っている尾根との合点に出ると視界が少し開けて来た。木の枝がアイゼンが引っかかり倒木を潜り乗り越えて進むと小さな岩峰の下に出た。甚しや大天狗は目前に有る。"さあ元気を行こう"と自分で自分に気合をかけて岩稜を辿るとク〜8mの壁状をしている岩につき当たった。右も左もすっぱり切れており逃げる争は出来ない。トレールは左を登っているが右を直登する争にして取り付く。2m位登ってつまってしまい素手になって登攀する上の太い木に手が掛った時にはホッとした。又で雪が飛んできた岩稜を辿ると大天狗の下に出た。この辺りから上は昨年6月に赤岳沢に采た時に途中から逃げて登って采た争が有るので気は楽で有る。大天狗は左を登るつもりで有ったが下の岩で手こずったのであっさり右を捲いて小天狗とのコルに出た。12時55分 尻がだんだん強くなって来た。テルモスからコーヒーを一口飲んで小天狗の左手の斜面を登る。もう赤岳が右手赤岳沢のつめの上に堂々と立っている。111加減ヨシタ足をひきずり登って行くと左上をトラバースしている2人のパーティーを見る。すぐ追いつくとキレットからの縦走の人達で有り私もいつの間にか稜線に出ていた。空はどんよりと曇ってしまい、強い西風がふいている。地吹雪が顔に当り痛い位で有る。どうせすぐ下りだと思いきやッケを着用しなかったものだから素直に寒い。竜頭峰に13時30分。道を間違えて文三郎新道の方に下った。登り直すのもおっくうになってしまった。そのまま下る争にしてアった。少し下るとまるまるとみたいに尻が無くなる。どんどん下降して14時に行看小屋に着く。中山乗越をシリセイドで滑り下るともう赤岳鉾泉の赤い屋根が見えて来た。14時30分 赤岳鉾泉着 今曰横岳西壁を登っている筈の谷川・中野の両君を待つて3人で下山した。

記 水島 翠男

1966年正月の甲斐駒

谷川 玄海・藤岡 寛幸

私と藤岡は、昨年夏赤岳沢右ルンゼに登り積雪期の登攀は充分成算ありと見て、12月中より何度が甲斐駒行を計画したが、天気が悪く中止した。そして昨年末最終的に正規な合宿の中止が決定したので、秋に上げた荷物の整理を目的として駒行が決り状況さえ良ければ右ルンゼアタックを決行することで離京した。大晦日の夜比較的すいているの時刻分かの臨時列車に飛び乗って新宿を出発、韭崎で白須行の始発バスを待つ。終点白須で下車したのは7〜8人でその中の2人のパーティーをさそい神社までタクシーで行く。数日間降雪がない柳で歩き長い道をハイペースで進む。今日元旦はデポの有る大小屋まで、時間の余りがあればハ丈岩の屋までの荷上げと、赤石沢右ルンゼの偵察を行う予定で居たが、七丈へ着いた頃にはいやになって中止。今日の天気は曇りがちであった。翌日は元旦より天気は良い柳であったので勇んでハ丈目指して出発、しかし雪が非常に多い柳である。今日の出発点である七丈より森林限界となって反が非常に強く麓の感覚が失くなってしまったハ丈に着いてどこにあるかわからない岩小屋を掘り出してから足を出してツマ先をカイロで暖めたらまやうや感覚がもどって来た。岩小屋より赤石沢へのトラバースである。夏なら道をトコトコ歩けば良いのであるが、3月の柳に多い雪の懸雪壁状をしている一応ザイルを付けてトラバース、しかし雪は軟らかいのでヒザ近くまでそぐり滑落の可能性は少なかつた。祭に展望台へ着く、しかし雪があまりに多いので雪崩の危険性が強く藤岡と相談の末今回のアタックは中止にする。そしてその日中にデポを整理下山してしまった。今回の山行中、私は最近これと云った山行をしていないので自分のフィットが減退しているのを強く感じた。(タイム不明)

記 谷川 玄海